合理性對非合理性の問題を通じて觀たる『極限概念の哲學』（其二）

左右田喜一郎

III

此の如く合理性と非合理性とは、吾等が通常採る立場たる分析的論理に於ては常に形影相伴ふて須臾も離るべからざるものであるが、此の二元を救ふて些の非合理性の痕跡をも殘さゞらしめんとするの道は、前の下より上に向ふ傾向とは全く反對なる上より下に向ふ卽ちLaskの所謂發出的論理 emanatistische Logik の立場であつて全體と部分なる考へを導くものである。卽ち無限の特殊たる非合理性より上に昇つて其のAllgemeinheit ―― Kantの所謂 das Analytisch-Allgemeine ―― たる合理性に進むに非ずして、無限の特殊性を其の中に含む統一體Allheit ―― Kantの所謂 das Synthetisch-Allgemeine ―― より俯觀して此の個々の特殊を考ふる場合である。[1] 此の場合には恰

もKantがOrganismusを考へたる場合の如く其のGliedの如何なるものもumsonstのものなく凡て其自身Zweckにして又同時に相互にMittelたりとする如き場合に於ては無[2]限の特殊たる非合理性は一個のein geschlossenes Ganzesの中に一義的に其の位置を與へらるゝが故に、此の統一體たる全體より眺められて各特殊は悉く非合理性たることを失ひて凡て合理化の過程の中に埋沒し去らるゝことゝなることが出來る。此の場合に於ては部分は全體を要求し且つ部分々々を相互に要求する。之に反して全體は亦部分を要求し且其の中の部分をして各相互に要求せしむる。無限なる雜多は有限なる一個の完了體の中にあつては夫々に全體より又相互に要求せられ制約せられて一義的の地位を保有することを得る爲に皆例外なく合理化の過程其自身を形造るこゝとなるに至るであらう。茲に至つて進んで全體の內容と其の範圍(Inhalt und Umfang)とは同一義となりHegelも稱へた如く普通の論理とは反對に範圍と共に內容は增加しdas Allgemeineの最高なるものは又具體Die Konkretheitの最高階段を表示するものとなるに至る。此の如くんば初めて非合理性と合理性との二元は遺憾なく超越し得らるべきである。

(1) E. Lask: Fichtes Idealismus und die Geschichte Tübingen 1902. S. 48

Kant: Kritik der Urtheilskraft. (Reclamausgabe) S. 294-5

(2) Kant: a. a. O. S. 257-8

而かも是到底形而上學たるを免れぬ。Kant が Organismus に關する teleologische Beurtheilung を指して其は refrktierende Urtheilskraft に屬し[3] bestimmende Untheilskraft に屬することなしとしたるに反して、もし之を認識論の上に適用せらるゝものとせば正に bestimmende Urtheilskraft に屬するものとするに等しいものである。此の如き認識の上に於ける非合理性の剿滅は、もし全體より部分を deduzieren し得又全體は部分によつて konstruieren し得るものならば疑ひもなく可能であるけれども、吾等の認識は Kant も屢々言ふた如く der diskursive Verstand によるものとし直覺的 intuitiver, anschauender なるを得ずとするならば、全體より部分を deduzieren して一義的に其の位置を定め得べしとし又は全體は部分によつて完全なる合理性に構造せられ得べしとすることは到底不可能であると云はねばならぬ。こゝに管々しく例證を用ふるまでもあるまい。此の意義に於て凡ての全體を出發點として部分の地位を一義的に定め得べしとする社會學說、人生觀は多くは仔細に其の論理を檢するときは皆自ら知らずして一個の形而上學に墮せるものである。此の故に合理性と非合理性との二元

は此の形而上學的考へ方を採ることに依つて認識論から除き去ることを得ない。形而上學としては吾等の論外に屬する。

(3) Kant: a. a. O. S. 288.

吾等の認識に於て遽に此の境地を髣髴せしめ得るものは唯一の數學あるのみなることは既にMaimon以來學者の注目した所である。Laskは此の間の消息を傳へて甚だ明瞭であり確かに一の注目すべき研究を提供したることを疑ひ得ぬが、數學に於ける非合理性の滅却を許しても、自然科學に於ては之を以て實際上の經驗に於ける特定の對象に向はしむることを得ずとなしたるMaimonの說にも見得る如く、數學は一個特殊の地位を有するから假令之が分析的論理より發出的論理に至る過渡の段階を形成し得んとしても之によつて吾等の一般認識に於ける合理性對非合理性の二元を打ち破ることを得るものではない。數字以外吾等の認識はKonstruktionによつて成立し得ないからである。既にKantの空間概念 Raumbegriff に見たる如く凡てのRäumeは其のGattungsexemplareには非ずして唯一の凡てを包含するRaumの限定に過ぎずとして Raumbegriff を多くの部分內容より成る構成體とせずして全體を包含する統一完全體なりとしたる如きは其の數學的思惟の一班を示すもので

ある。此の場合に於て全體は部分の成果にはあらずして寧ろ其の前提をなすものである。合理性對非合理性の問題に關して吾等の思索の指針は茲に明かに示されて居るけれども此の考へを以て凡ての形式上のみならず內容上の對象認識に擴げんとするときは、一點の疑もなく Hegel の先蹤に倣ふて發出的論理の形而上學に陷ることを免れ得ない。何となれば對象の認識に於ては數學に於て見る如き概念の Konstruierbarkeit と其の部分々々の間にある Kontinuierlichkeit[5] との二を缺くが爲めに各 Begriffsexemplare は之に比すれば稍々孤立の關係にあるからである。勿論數學以上に概念內容と其の中に含まるゝ個々の特殊態の範圍とが、卽ち一般に特殊とが直接に全然合一するものであるとすれば一切の論議は無用となりて茲に明かに形而上學は成立すること前段に見たる通りであるが、それでなくとも數學を以て直ちに一切の對象認識を律するといふことは出來ない。卽ち一般對象の認識に於ては合理性非合理性の二元は形而上學に入ることなくしては破られ得ぬものであると云はねばならぬ。

(4) Lask; a. a. O. S. 39 ff

(5) Lask: a. a, O. S. 49.

IV

茲に於て形而上學に入ることなくして認識論の問題として非合理性を其の儘に掴むで合理化せんとする所謂兩者の中間を縫ふ試みとしての個性 Individualität の問題が考へられ得べきである。個性の問題が此の意味に解釋せらるゝ場合に於ても先づ考への中に入り來るは言ふまでもなく Hegel であるが、之に直接間接に影響せられて方法論上に於ても歴史の基礎づけとして此の問題が特別の重要を得來りたることは更めて茲に繰返す必要なきまでに學界に周知の事實である。現今認識論に於ける興味の中心點は此の個性の問題であるといふことも恐く否み得ない事實であらう。

個性の問題は此の如くして歴史の問題として、文化の問題として人に關聯して考へらるゝ事が普通である。勿論外界自然物に對しても個性の問題が全く無意義なるべしとは考へられぬけれども――例へば富士山とか或は唐崎の松とか――此の場合は人に關する個性の問題の Übertragung として考へられ得る範圍に於てのみ意義ありとして吾等に問題となり得るだけである。個性の問題の中心點は人にある。

而して當面吾等に特に重要なるは個性の問題は意志自由の問題と關聯するが爲めである。

個性は言ふまでもなく所與に對する自然法則的考察たる普遍化に對立して一以て他と分つ所以卽ち Meinheit, Deinheit を分つ所以の Besonderheit の Charakterisierung を scharf bearbeiten するによつて起る。卽ち個性は先づ其の基礎に於て一以て他と分つ所以の特殊性を見ることは明かである。而かも此の特殊性のみが個性を形成すべきものではないことも亦明かである。單純に其々の Bestimmtheit を有し Besonderheit の明なることのみによつて直ちに其の個性を基礎附けし得べきものではない。卽ち所與其の儘非合理性其の儘、Meinheit, Deinheit 其の儘の形ちに於て個性を基礎附けし得らるべきではない。個性問題の中心點は茲にある。

個性が單純なる特殊性、非合理性と區別せらるゝ所以は其の特殊性が依つて以て性殊性を保持する統一體たり得べき一般的の基礎を豫想し其の特殊性の支持者たる個體をして其の組織を解體せしめざる結紐を其の間に認めんと欲するにある。非合理性を其の儘に begreifen 捕捉、理解せんとすることから此の捕捉理解の根據を豫想する。此の根據なければ非合理性は其の儘に雜然たる非合理性であつて

begreifen せられ得べき非合理性とはなり得ない。從つて個性は非合理性、特殊性其の儘なることを意味し能はぬ。卽ち非合理性に對して何物かを豫想せざるを得ないものである。單純に一以て他と分つ所以の特殊性が意味なき並列の關係にあることから相互に關聯して意味ある共存の狀態たる個性に移るには、單なる特殊性が一個の意味を其自身の內に含む系列の中に入ることが必要である。若くは此の如き系列の中に入りたるものとして考へらるゝことが必要である。換言すれば單純なる所與たる非合理性及び是より進むで Meinheit, Deinheit の決定せられたるものが、自然法則とは異なれる猶他の一の合理化の系列の中にあるものとして考へらるゝことが必要である。此の一定の一般的基礎の上に立つ合理化の系列の上に於て一以て他と別つ所以の特殊性は卽ち合理化的特殊性ともいふべきものであつて、其の中に在つては當然特殊性が其の特殊性を保つ所以の基礎を有すべきである。個性とは卽ち此の如く解せられたる特殊性の謂である。

此の如くんば個性には一定の基礎的豫想を要求する。單純なる特殊性、非合理性ではあり得ずして、自然法則とは異なるけれども亦一種の合理化的過程を離れて考へ得べきものではない。個性に關して猶ほ der Begriff を學者が云爲するのは只此の

如き合理化によつて理解せられたるものの das Begriffene あることを示すからである。所謂 individueller Begriff なるものは卽ち是である。

然らば此の單純なる特殊性卽ち特に意志自由の問題に關聯して考ふればMeinheit, Deinheit の決定せられたる各種の非合理性を個性と考へしめ得べき合理的過程の基礎としての合理性なるものは之を如何に考ふべきであるか。此の如き合理性として何を考ふべきであらうか。

余は茲に Rickert に倣ふて方法論を開展せんと欲するものではない。が、併し個性は或る合理化的系列に於て Meinheit, Deinheit の特殊性を謂はゞ發揚せんと欲する意味に於て普遍化概念構成の合理化的過程に從ふことを得ない丈は言はずして明かである。Das Analytisch-allgemeine を打建つるものと全く反對の方向に走るべきは明かである。此の意味に於て先づ吾等の頭腦を刺激する最初のものは das Synthetisch-allgemeine であることも寧ろ甚だ自然であらう。乍併吾等は復た此の場合に於て前述べた如き理由から形而上學に入ることを許さないとするならば、何が個性を基礎附けし得べき合理化的過程であるであらうか。或は何等かの Modifikation によつて認識論に於て猶ほ能く das Synthetisch-allgemeine を救ひ得るであらうか。兎にも角に

も das Analytisch-allgemeine を排することに先づ其の出發點が求めらるゝ丈は明かであるとしても其の次にとるべき道は果して何であらうか。

個性を基礎づける合理性が何であるかを尋ねんと欲せば此の如き合理化的系列に於て凡ての個性が如何なる地位を占むるを得るやを見るに如くはない。個性は此の如き系列に於ては一以て他と別れて並存し而かも其分れて並存するや相互に內的に關聯する所あるを要するのであるから其の內的に關聯せしむる所以の意味は其の考察の中に入り來る個性の全部を相互に verbinden 義務づけし得るものでなければならぬ。と同時に其の「意味」なるものは又從つて各個性を合理化せられたるものとして考察すべしとの意味に於て個性と合理性自身とをも verbinden し依つて以て個性をして其の個性の位置を保持せしめ得べきものでなければならぬ。果して此の如くんば das Analytisch-allgameine が單純に其の Exemplare に對して有する一般と特殊との關係以外 Exemplare 相互の間に孤立の外何等の關係をも想定せしむるを許さぬといふ如きものとは、個性と合理性との問題は甚だ趣きを異にするものであつて、此の意味に於て個性を基礎附くる合理性は寧ろ das Synthetisch-allgemeine に近きものあるを思はしむるは自然である。而かも之を其の sachlicher Grund とするこ

とは bestimmende Urtheilskraft に訴ふるものであるとして、卽ち形而上學に入るものとして許され得ぬとするならば茲に殘る可能性は唯々一あるのみとなるは論理の當然である。卽ち各個性を互に內面的意味に於て相關聯する位置に並列せしめ而して其の意味の純化の一方的高昇の過程の窮極に於て其の歸趣として、の合理性が立つとの意味に於て、之を內容的に考へて Kant の Idee、形式的に考へて Ideal として其れに係はらしめ得べき個性を摑むの regulatives Prinzip を考ふるの外道がない。然らば卽ち Sollen の想定に及び Wert の確立に想ひ到らざるを得ないであらう。

此くして初めて個性と個性との間に obwalten する相互の關聯は何等かの意義に於て其の連續 Kontinuum を認めしむる所以ともなり其の「意味」は又軈がて其の一方的高昇によつて Idee と思はしむべき Zweck 其のものを指示するに至り得べきである。既に Lotze が言ふた如く此の意義に於て Sollen は Sein に先行し且つ其の意味を決定するといふことも出來よう。從つて個性として其の系列の上に全體の基礎を失ふことなしに其の特殊の位置を保持することもなし得るのであらう。最近の認識論は價値につきては甚だ屢々之を說くの機會を有したことであるから今改めて余が茲に價値につきて多くを說述するの必要もあるまいと思ふ。

此の如く個性を基礎づくる合理性はSollenであり Wertであるとするならば合理性對非合理性の問題に對して認識論的に個性を可能ならしむる所謂 Wertbeziehungは之によりて決して全體より部分をdeduzierenする如きものではなく、又さりとて部分と部分との間に相互に何等の關聯もなき非合理性其の儘の姿を示すといふものでもない。卽ち個性をして可能ならしむる Wertbeziehung によつてWertたる合理性も個性の與件的基礎たるべき Meinheit, Deinheit の特殊性も共に認識の範域內に夫々の意味を具有し來りて、一方には形而上學に奔り入ることを避け、他方には認識前期の所與を其の儘に捉へんとする直覺主義の神秘に免れ去るを防ぎ得べきである。

V.

個性は此の如くして其の根基に於ては非合理性でありながら價値系列に入ることによつて又一面合理化的過程の成果であるといはざるを得ないものである。吾等が前段に於て研究したる意志自由は人の意識、行爲に關し其の合理性の限界に於て Meinheit, Deinheit etc. を定むるものとして見られたのであるが此の如くして非合理性中より一個の普遍妥當性を有する個性となる爲には此の如き特殊性たる非合

理性が Idee, Wert に beziehen せられて合理化的過程に入り込むことを要する。此の場合に意志自由の問題が Meinhet, Deinheit を定むる限りに於て認識論上の意味を有するものと見らるゝとせば、其の限りに於て亦他方には個性の問題に對しても基礎を與ふるものとして其の意味を有すべきである。即ち換言せば意志自由の問題の係はり得る範圍に於て人の意識行爲が "Mein" "Dein" とせらるゝのであるが抑々其の Meinheit, Deinheit 等が決定せらるゝことを要するの論理上の基礎は何であるかと云へば、既に一個特定の決定を得たる「余の」若くは「汝の」意識、行爲が自然法則の樹立の場合に於けるが如く其の特定の方向の合理化的過程を始むる其の瞬間に於て Meinheit, Deinheit を失ふ如きものであつてはならぬ事は言ふまでもあるまい。即ち Meinheit, Deinheit が其の合理化的過程の中に於て常に殘存しながら益々其の意義を發揚する如き論理上の高き階段に向つて進むことが必要であらう。而して此の如きものは個性の問題に外ならぬ。即ち意志自由の問題が認識論上意義を有し得るは個性の問題が其の意義を有し得るものと恰も其の範圍を同じうせるものである。個性の問題は Meinheit, Deinheit を離れて何等の意義を有し得るに至らざるべきは明かであらう。依是觀之意志自由の問題とは其の妥當に關して範圍を同じうする。

従つて意志の自由によつて Meinheit, Deinheit が決定せらるゝことを要する所以は一に個性の問題があるからであると言へよう。此の如くして個性の問題より出でゝ直ちに續いて一個の深き考究を要するものとなるべきである。

個性の問題は此の如き非合理的特殊性より出發して特定の合理化的過程に入り込むものであるから此の場合に此の原始的非合理性たる Meinheit, Deinheit u. s. w. より出でゝ一個の普遍妥當性を含む Ichheit, Duheit, u. s. w. となる爲めには依つて以て此の如き普遍妥當性を與ふべき Sollen 又は Wert が介在するを要すべきは既に見たる通りであるが、今茲に更に進むで吾等の考へを要求する點は意志自由によりて決定せられたる Meinheit, Duheit の非合理性が一個の普遍妥當性を含む合理化的過程に入り込むで出來上つた高度の合理化せられたる非合理性(高度の——何となれば意志自由によつて見られたる Meinhet, Deinheit たる非合理性と雖も今見たる如く個性の出發點として一定の意味を有すとせば此の意義に於て既に何等かの合理化的過程に入り込みたるものとも見られ得るからである)換言すれば茲處には個性として見られ得るものが前の Wert の場合とは反對に其自身の內に何故に個性として見られ得るの基礎あるかを檢覈すべきである。卽ち前者は謂はゞ外的に個性を基礎づ

けし得べきものとしての價値又は當爲に關し、後者卽ち今吾等の之より研究せんと欲する所は謂はゞ內的に個性其自身の內に個性を基礎附けし得べきものありや、若しありとせば其は如何なるものであらうかといふ事である。卽ち個性を內的に分析考究して非合理的なる特殊性が合理的個性と考へしめらるゝを得べきものは外的に見ての價値又は當爲に對立して內的に見て其自身を基礎附けし得べきものであるが、果して此の如き何ものかゞあり得べきや否やを見たいと思ふのである。

茲處に此の問題に對して吾等が直に考へ浮び得るものは單純に然かあるものとしての經驗的自我に對立して、之をして普遍妥當性を具有せしめ得べきものとして超我的なるものがあらねばならぬとすることであらう。此の如く同じ自我の內に一方には變轉推移し得べきものと他方には永久に妥當し得べきものとを區別することは今更茲に哲學史を繰返して述ぶるの必要なきまでに吾等に直ちに考へ得らるゝことである。而して個性の問題は此の自我中の永久に妥當するものが猶ほ形而上學的觀念の如くに全然自我を離るゝことなく、卽ち永久に經驗的自我其自身を表明しながら猶且其自身に體得したる價値を其の內に具體化したるものとして見らるゝ所に中心點がある。換言すれば個性問題の中心點たる永久的妥當は謂はゞ

一方頭は上天の價値に觸れ之を體驗具體化しながら、他方足、地を踏んで非合理性たる Meinheit の中に深く沒しつゝあるものである。而して茲に困難にして且微妙なる問題は此の矛盾とも稱せらるべきことが端的に個性問題の其自身を形成する內面的性質なりとも見らるゝ所にある。此の個別的にして普遍的なる、非合理的にして合理的なる、實在的にして價値的なる所以は吾等をして永久に「天才」「獨創」「創造」の問題の中に哲學最後の問題の橫はるあるを思はしむる所以である。Contradictio in adjecto を許すならば是ぞ「超個的個性」の問題とも云へよう。

此の如く個性を謂はゞ內面的に基礎づけし得る所以の超個的個性は意志自由によつて決定せられたる Meinheit, Deinheit の非合理性と價値なる超越的合理性との Synthesis である。其自身非合理性 an sich でもなければ又合理性 an sich でもない。Meinheit Deinheit より出でたる謂はゞ生まの儘の個體と超越的價値との Synthese である。其故に單純なる價値の代表でもなければ又其の Gattungsexemplar でもない。非合理性たる個體に深く根ざしながら其自身一個の統一せる價値體 Wertkörper とも云ふべきものである。此の如くして個性が問題とせらるゝ場合には何時も之は倫理學上の問題としての人類の典型又は模範と云ふことに關するよりも寧ろ美學

上の問題に近きものあるを思はしむる所以は茲にあるといへよう。藝術上の創造が深く非合理的個體に根ざしながら其自身完了自足の價値體として其自らを統一するはさながらに吾等が當面の問題とする個性の內面的基礎としての超個的個性の問題と殆んど其の揆を一にするものである。倫理上の問題と美學上の問題との接觸を最も明かに思はしむるものは此の個性の問題である。而して吾等は之を認識論の問題として解釋せんと欲する。(1)

(1) Rickert: Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft に於て Kunst と Individuum とを比較せる條下を參照すべし。(近藤哲雄譯「文化科學と自然科學」第一〇三頁以下)

超個的個性は卽ち一方非合理性其の儘の姿にありながら、他方合理性其の儘の意味に解釋せらるゝものでなければならない。而して合理性其の儘の意味に解釋せらるゝことを得んが爲めには非合理性は合理化的過程に入り込みたるものとして解釋せらるゝ外に道はないであらう。卽ち靜的に見れば非合理性其の儘の姿にあると云ひ得るけれども動的に見れば非合理性其の儘ではあり得ないと見らるゝこと上來既に說いた通りである。而して合理性たる價値に關聯して外面より之を見て卽ち結果より靜的に見て非合理性其の儘の姿と見る側面よりは內面的發展的に

卽ち活動として之を見て其の合理化的過程に於ける價値を目標として進む側面を見る方超個的個性の意義を闡明し得るに庶幾い。此の如くして超個的個性の問題は目標としての價値に對する關係如何を動的に見る所以に於て解釋の鎖鑰は横はるといへる。卽ち外部に價値あつて之に係はりて意味を考へらるとするよりは內面的に言ふて個別的特殊性たる Meinheit Deinheit の非合理性が價値に向つて進む過程に於て其自身を幾多の階級に於て ummodeln しつゝ遂に其の窮極に於て自足圓滿の一體に其自らを統一すると見る方面に觀察を向くることが緊要である。彼は外面的に價値あつて之を導くと見、是は內面的に價値に向つて精進すと見るべきである。勿論彼なくして是ありと見、是なくして彼ありと見るは誤まつて居るが此の場合にも亦屢々前に見たごとく暫く觀點の重心を異にして考へ得ることであらう。卽ち內面的基礎として超個的個性を考ふるといふことは取りも直ほさず Meinheit Deinheit の個別的特殊性が一定の方向に於て絕對的純化の過程を終りて其自ら其の一定の意味卽ち其の係はるべき價値の表現としてのみ考へ得らるゝの可能性を具有することを前提として、其の純化の過程の窮極を想定するといふことに外ならぬ。超個的個性は此の意義に於て Meinheit, Deinheit の窮極を意味する。Meinheit, Deinheit

の非合理性より進むで超個的個性を以て或る特定の意味の表現なりと考へ得らるゝに至るまで一方的純化の過程を進められたる時に個性の問題は內面より湧き出づると稱してよからう。之を導くものとして外面的に見たるときには之を價値と稱し、之に達するの內面的努力として其の完了を想定したるものは超個的個性といふべきである。此の如くして超個的個性の解釋を容るべき個性は價値を具體化したる特殊性なりといふことが言へよう。卽ち超個的個性は個性に關して價値の表現と解釋され得べきものである。特定の系列に於て價値附けられたる個性の謂である。

此の如く考ふるときは個別的特殊性が一方的に純化しつゝ進む其の過程の窮極に於て表はるゝ圓滿自足の完全體は其の合理化的系列其自ら丈の上につきて觀察すれば、之を貫通統一する意味は假令他の觀點より見て非合理的なりと云ひ得ることありとしてもそは其の出發點より到着點に至る凡ての基調を形成するものといふことが出來るから之を neglect し得て其の過程の表面に於ける可變的成素の上より見ては終に如何なる非合理的成素をも含まぬものであるといふことが出來るであらう。恰も完全無缺なる意味の表現として考へらるゝ際のラファエロに一觸の筆

を加へ得ず、ベートーヴェンに一律をだに增し得ざるに等しいであらう。此の場合は殆んど全體が部分を又部分は全體を要求しつゝあるとも見得て物皆凡て合理性と云はるべきに近い。

而かも茲に猶且つ個性ありといふは其の內に非合理的成素を見ようとするものであつて、此の場合には其の範圍に於ける一方的純化の過程の表面より深く沈んで其の根基として橫はるものを見て而して之を外部の或る同樣なる過程と比較考量せんと欲する如く、其の考察旣に內部丈に止まらずして其の範圍より外部に向つて動くときである。個性の問題と雖も其自身完了自足の統一體となるに至る純化の過程其自身丈の考察に止まるものならば何等かの意義に於て特殊態としての個性の問題は何物も起り得ない筈である。苟も個性問題の云爲せらるゝは此の如き內面的統一を語り得る自足體が外に向ふ場合に初めて起るものであつて此の場合は言ふ迄もなく外部に對して同樣に非合理性に根ざす多くの個性に向ふときを意味する。茲に至つて此等の多くの個性は各々內的には結付きながら他方には一以て他と對峙するを見るに至るであらう。

多くの夫々に獨立せる基礎と意義とを有せる個性が此の如くして互に獨立なれ

ども孤立することなく相互に關聯して並存する所以の論理的根據は此の如き多くの個性を相率ゐて一方的純化の過程に入らしむる更に他の、謂はゞ高度の合理的價値に外ならずといふべきである。

人の個々の意識又は行爲或は此等を統一的に考へた綜合を驅つて其の意味に於ける普遍妥當性に關して超個的個性と解せしむるに至りたる當爲は其の係はるべき範圍に於て之を外面的に導く所以のものとして一個の價値なりと解すべきであるが、更に進むで此の如くして吾等に考へられたる合理的超個的個性が尙且つ個性なりとして何等かの意味に於て非合理的なりと解せらるゝ所以のものは此の如き個性の多くが相並列して更に一個の高次元にある價値系列(例へば或る特殊の文化價値を嚮導觀念とする系列)の中に入り込みたりと解せらるゝものであつて、其の系列に於ける純化の過程を外面的に導くものは亦其の係はるべき範圍に於ての價値(例へば文化價値)と稱せらるべきである。謂はゞ高次の價値と稱せらるべきであらう。此の如き價値と實在との關係は或る特定の次元に於て常に同樣なる Prinzip に從ひつゝある所の謂はゞ一般的のものであるが、唯々其の同樣なる Prinzip の妥當する次元丈は場合々々によつて種々に異なり得べしといふに過ぎざるものである。

VI

以上の意味に於て合理性と非合理性との問題は一方形而上學に入ることなく他方直覺主義に免れ去らざる以上吾等の認識の上に於て個別的特殊性の超個的個性に對する場合も、又多くの此の如く解せられたる個性の特殊的文化價値に對する場合も等しく皆同一の原理の下に支配せられねばならぬ。卽ち各々の場合は合理性對非合理性の問題の一般的考察の下に持ち來たされて初めて其の意味を明にし得べきである。吾等は此關係を更めて茲に明瞭に意識に上ほすを以て以下問題解釋の爲めに必要であると思ふ。

凡そ非合理性は合理性の基礎となりて先づ其の合理化的過程の出發點となり、兼ねて其の過程に對して終始何等かの色彩を與ふるものとして其の全部を通じて合理性の純化の最後に至るまで其の非合理的成素として殘留するものであることは前既に見たる通りであるが、Meinheit, Deinheit の特殊性が個性の問題として殘留し其の性質をして自然法則的たらしめず結極に於て個別的たらしむる如きは卽ち其の顯著なる一例と稱すべきである。反對に合理性は又其の非合理性に對して、之も既

に前に述べた所によつて知り得る如く、其の系列に於て一般的基礎を與ふるの故を以て非合理性を其の儘の姿に止まらしむるものではなく之を純化しつゝ進むものであると解すべきである。吾等の當面の問題とする個性の場合につきて云へば凡ての個性は此の如くして謂はゞ rationalisierte Irrationalität として見られ得べきものであり又其の之をして可能ならしむる Wert は irrationale Rationalität として考へられ得べきものである。こは自然法則の場合に於ても同樣であつて特殊の自然法則は勿論因果法則其自身と雖も、價値の中にも猶ほ非合理的成素あることを認めしむるといふ意義に於ては此の場合にも尙他の範疇と分つ所以に於て irrationale Rationalität として見らるべきであり、而して各種自然法則の下に subsumieren せらるゝ各具象的 Fälle は又明かに非合理性でありながら此の一定の合理化的系列の中に入れるの故を以て rationalisierte Irrationalität として考へられ得べきであらう。此の兩者、自然法則と個性との問題は自然科學と歷史とに分るゝ方法論上の二元主義の成り立つ所以の根本として一は合理性を、他は非合理性を代表するものとして吾等の認識に於て相互に歸一することを得ざる「大サ」を其の窮極の根基に有すといふは[2]唯々主として其の傾向の重心點が何處にあるかを示すに過ぎない。吾等の認識に於ては其れが

自然法則に關するにせよ、個性又は歴史に關するにせよ、共に其の各々に於てrationalisierte Irrationalität と irrationale Rationalität との二の側面を有するは免れ得ないことである。吾等の認識は diskursiver Verstand によるが故に合理性及び非合理性の二元を脱出し得べからずといふ場合には嚴密に云へば卽ち今述べた如く合理性も非合理性も互に相制約し合ふたものでなければならぬ。此の意義に於て自然法則が吾等の認識の條件に合ふ所以は何等の Vorbehalt なしに亦個性の認識にも對し得べき理由である。共に此の如く二元的なりといふことは卽ち吾等の認識として又兩者がともに正當に妥當性を有すべき理由を語るものである。Rickert の所謂 Generalisierung も Individualisierung も共に認識として等しく妥當性を有し得べしとする理由も茲に至つて明かであるが是決して個性又は Individualisierung の問題が認識と平面を異にする形而上學又は直覺の神祕に於ける問題とならざることを證する所以なりとも考へ得るであらう。

（1）拙著「經濟哲學の諸問題」第三版第百五十七頁參照

此の如く吾等の認識は如何なる場合に於ても二元を脱することを得ない。之を各種の文化價値と個性との關係に於て見れば其れが經濟にまれ政治にまれ、藝術に

まれ、宗教にまれ凡て其の文化價値たる Sollen と其の個性たる各場合の文化生活としての Sein との自足完了の統一體が[2]各種の文化價値及び文化生活につきて考へられ、而して此の如き完了體の多くが互に並列すると見るべきであるが、此の場合に各般の文化價値が內容的制約を受けて例へば經濟的、政治的、藝術的等の文化價値として成立つ所以は決して文化價値一般より deduzieren し得るものではあり得ない卽ち天降り的なるを得ない。又他方には之に對應する各種の文化生活なるものは之が認識論上可能となる爲めには單純に混沌の所與より特殊性其の儘として浮び出づることを得るものではない、Sollen としての各種文化價値によつて其の認識論的可能の基礎を得なければならぬ。茲に一個の困難なる認識論上の循環がある。恰も先天的範疇に於て其の意味を決定すべき成素としての認識材料を豫想することなくしては範疇自身不可能でありながら又其の範疇なくんば其の認識材料は認識材料としてすら成立することを得ぬといふ Zirkel にあるものも同樣の關係であらう。此の循環を脫出すべき根據は之を何處に求むべきやは後段に研究すべき一の困難なる問題を形成するけれども其[3]の合理化的系列の出發點を形成すべき非合理性は其の窮極の合理性に對して非合理的制約を與へ、又反對に其の非合理性は合理化の

過程に於て其の合理性に條件づけらるゝと見るのは、吾等が認識に於て離るべからざる合理性と非合理性との二元の意味を語るものに外ならぬ。卽ち吾等の認識が形而上學に昇らず又直覺の神秘に沈まざる以上此の二元主義は認識其自身の性質を端的に示すものなること誠にKantの說く所以外に出づる能はざるものと見るべきであらう。

(2) 前揭拙著第二二三—四頁

(3) 此の點に關してE. Lask; Logik der Philosophie und die Kategorienlehre. 1911. S. 165 ff. は參照に値すべし。

以上之を換言すれば合理化的過程の出發點を基礎附けたる非合理性は其の合理化の窮極に至るも尙非合理的成素として殘存し合理性のある處常に其の中に非合理性の問題として吾等に解釋を迫るものであるが、他方には又非合理性より出でゝ之が認識論上可能となり得る爲めにはSollen又はWertたる合理性の滲透を要するものとして非合理性中に於ける合理性の問題として等しく吾等に解釋を迫り來るものである。一は合理性中に於ける非合理性の問題として、他は非合理性中に於ける合理性の問題として表はれる。之も亦前旣に述べた如く單に問題の重心點を示すに止まるものであつて、共に吾等の認識たる以上其の重要の差はありながら如何

なるものにも此の二は何れも其の一を缺くことなく認識成立の條件として要求せらるゝものである。即ち凡ての合理性は非合理化せられたる合理性として、又非合理性は合理化せられたる非合理性として一個特定の系列の中に並存すべきものである。是吾等の認識の內的性質を端的に示すに足る所以であり且つ其の論理的構造を表明する所以に外ならぬといへよう。

此の二元的なる合理性と非合理性との關係は個性の問題に於ては價値に照らして其の普遍妥當性に關して超個的個性と解せられ得べき個性と Meinheit, Deinheit 其の儘の意味を有するに過ぎざる特殊態との關係である、又同樣の意味に於て超個的個性と解せらるべき個性が入り込むべき更に高次の一個の價値系列に於ける多くの此の如き個性と此等が相牽ゐて係はるべき其の價値との關係でもある。即ち各々皆合理性非合理性の一般的問題の特殊の場合であると解し得らるべきである。

而して茲處に特に吾等の爲めに問題となる事は此の合理性と非合理性との問題に於て此の兩者の關係を解するに若し分析論理に從ふて普遍の特殊に對するものゝ如く解すべしとするならば、夫々の非合理性は皆相互關聯なき孤立的のものとなり了りて、單純に普遍に對して夫々 Gattungsexemplare としての意義を有するに止まら

ねばならぬ。然るに今吾等當面の問題に於て個性は既に見たる如く其の Meinheit Deinheit を失ふことなくして而かも非合理性其の儘に止まることもなく、換言すれば其の Meinheit を Meinheit として Deinheit と區別しながら又 Deinheit は Deinhet として Meinheit, と區別しながら而かも價値を其自身の中に內面的に含む所謂超個的個性たる自足完了體となる所に其の固有の意味を有し、更に進むで此の如き各個性は相率ゐて各自の意味を語りながら相關聯して其自らの合理化的過程の中に入り込み以て其の窮極の價値に對しつゝある、卽ち其の價値に係はりし個性は他の個性と相對立して初めて其の特有の意味を語るを得べきである。然らば各超個的個性と Meinheit, Deinheit の特殊態との關係と等しく又窮極の目標たる價値と各々の個性との關係を尋ぬるとも單純に普遍と特殊との關係として觀察すべき分析論理に從ひ得る如く然かく簡單なり得ざるは明であらう。さりとて又個性の各相互に於ける關係が一以て他を要求し、兼ねて凡てが又當然有機的全體を要求するものなりとして此の合理化的方面を見ること餘りに强きを致し遂に Hegel が明かに指し示した如くに Begriff より凡てを合理化するか、又は Fichte の晩年に於て歷史哲學上になしたるが如く價値考察の上に個性と全一體とを想定して、前者の地位を以て代位代替

し得べからざる一員とし、此等は又他面全一體としての有機的價値連關を形造るとする如き形而上學に奔りて Meinheit, Deinheit と超個的個性、個性と價値との關係を部分と全體との關係なりとして互に相 deduzierbar なりとする發出論理に從ふことをなし得るものでもあり得ない。卽ち兩者の何れにも走ることを得ず、茲に認識論上の Dilemma がある。

意志自由によつて決せられたる Meinheit, Deinheit の非合理性より出でゝ超個的個性なる合理性を形成せしむる所以、兼ねて此等の個性を亦並列の狀態にある個性卽ち非合理的成素を此の中に認めて全體としての價値に對せしむる所以、又は其の個性と個性との間の關係を誤らしむる所以は然らば如何に之を解釋すべきであらうか。一般的に換言すれば合理性對非合理性の此の關係は果して如何に解釋せらるべきであらうか。認識論上此の Gordian knot は如何にして解かるべきであらうか。

（未完）